

「エコマルクス主義」の現在と自然環境問題

島崎 隆(季報『唯物論研究』第105号、2008年)

一 問題状況をどう開くか？

ソ連・東欧の社会主義が崩壊したのち、資本の一元的世界支配が実現したのにもかかわらず（否、実現したがゆえに），むしろ歯止めの効かなくなった資本の運動は、新自由主義イデオロギーを振りまきつつ、各種のエコロジー危機（地球温暖化、食料問題、資源・エネルギー問題など）をはじめ、戦争、テロ、世界規模での南北格差、先進国ですら発生する貧困の状況（ワーキングプア）など、あらたな問題群を生み出してきている。ソ連・東欧の社会主義国の崩壊後、このような状況になるということをだれが予想しただろうか。資本の活動が思う存分展開されると、こういう状況になるということが、いまやあからさまに示されているといえよう。

ところで私は、日本でも二年前に公開された映画「ダーウィンの悪夢」について論評したことがある*1。この映画は数々の賞を取ったドキュメンタリー映画であるが、ヴィクトリア湖に接する、タンザニアのムアンザ市で発生している生態系の汚染と地域住民の貧困や生活苦を中心に描いたものである。だれかによって放流されたナイルパーチという巨大肉食魚が在来他の魚を大量に捕食することによって、湖の生態系が攪乱され汚染されているが、他方同時に、魚肉製造工場が資本家によって経営され、この魚は不可欠な産業にもなっている。工場の経営主は、映画のなかで、「生態系がナイルパーチのために死につつあることはわかっているが、別にかまわない。今度は綿花に投資しようと思う」と語る。私は思わず、マルクスが資本家の「標語」魂として書き残した「わが亡きあとに洪水よ来たれ！」*2というスローガンを思い出した。

ここでは、自然環境の破壊は、私的企業による経済的活動と密接に絡まりあっており、後者が前者の基本原因であり、規定的発生源である。いうまでもなく、ナイルパーチが悪いわけでもなく、魚を捕獲したり、工場で雇われたりしている地域住民が悪いわけでもない。そして、こうした全体状況を説得的に把握することを、エコマルクス主義は最大の関心事としてきた。本論で私は、環境問題の真の発生源である経済的な資本の運動を鋭く批判し告発する、このエコマルクス主義ないしエコ社会主義の理論状況を紹介・検討したい。

二 「実践的唯物論」から「エコマルクス主義」へ

エコロジーとマルクス主義を結合する方向で考えると、以下の二つの問題が前提とならなければならないだろう。そしてそこに、エコロジーとマルクス主義の交差が現れる。

(1) ソ連・東欧の社会主義を批判的に包括するなかで、深刻な自己批判をともないつつ、マルクス主義・社会主義の真のありようを再構築する。この姿勢なしに、「いまマルクスが新しい」などとして、マルクスやレーニンを復活させるのは無責任というものであろう。

(2) ローカルかつグローバルなかたちで多様に噴出する環境問題について、これを重視し、マルクス主義は理論的かつ実践的にどのように対応したらいいのかを考察する。

実はこの二つの課題は別々ではなくて、私見では、もしマルクス主義を「実践的唯物論」と規定して、オリジナルのマルクスを再発見できるとすれば、それがおのずと一種のエコロジーとして出現するのである。もちろんそこでは、マルクス、エンゲルス、レーニンらの思想がいかにかつソ連・東欧の社会主義崩壊に関わっていたのかも、同時に測られなければならない。

私もこの意味で、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』でソ連・東欧の社会主義の状況を原理的に検討しつつ、エコマルクス主義を初発的に展開したし、『エコマルクス主義』では、このテーマを本格的に議論した*3。この点では、エコマルクス主義者のジョン・フォスターの述懐が興味深い。

フォスターによれば、『破壊されゆく地球』（原著一九九四年）を書いていたときは、エコロジーについてのマルクスの理解は、マルクス自身にとって二次的にすぎず、それが現代のエコロジーに関する知識にあらたな、または本質的な寄与をするということはないと考えていたという*4。この時点で、彼もまた、他の人たちと同様、マルクス問題に関して大きな偏見に囚われていたのである。実は彼は、すでに同書で、マルクス自身が、産業革命が進展するなかで、労働だけでなく、自然もまた資本にますます従属することを十分に自覚していたと指摘し、それに関連する具体的引用もおこなっているにもかかわらずである。ちなみに、その引用とは以下のものである。

「資本主義的農業のどんな進歩も、労働者から略奪するための技術的進歩であるだけでなく、土地から略奪するための技術における進歩である。一定の期間だけ土壌の肥沃度を増加させる過程は、その肥沃さを長期間に渡って維持する基盤を破壊する過程でもある。アメリカ合衆国のように、発展の背景に大規模な産業をもつ国家では、この破壊の過程はより急速に進む。」*5

ところがいまや、フォスターは『マルクスのエコロジー』で、「マルクスの世界観が深

く、そして体系的にエコロジー的である」*6という構想を展開したのである。フォスターは、いわば思想史的に、大規模にマルクスのエコロジーを唯物論の歴史のなかで位置づけた。こうして、エコロジーの思想家マルクスの構想は、深い問題意識でマルクスを丹念に読解することによってのみ、ようやく把握されるものである。

さて、さきほど引用したように、マルクスは当時の農業化学者のリービッヒらの影響を受けて、農業の資本主義的利用が引き起こす環境問題に注目したとき、とくに彼が念頭に置いたのは、労働と生産および消費の過程で、人間（社会）－自然間の物質代謝が「攪乱」され、両者の間に「亀裂」がはいるという問題であった。

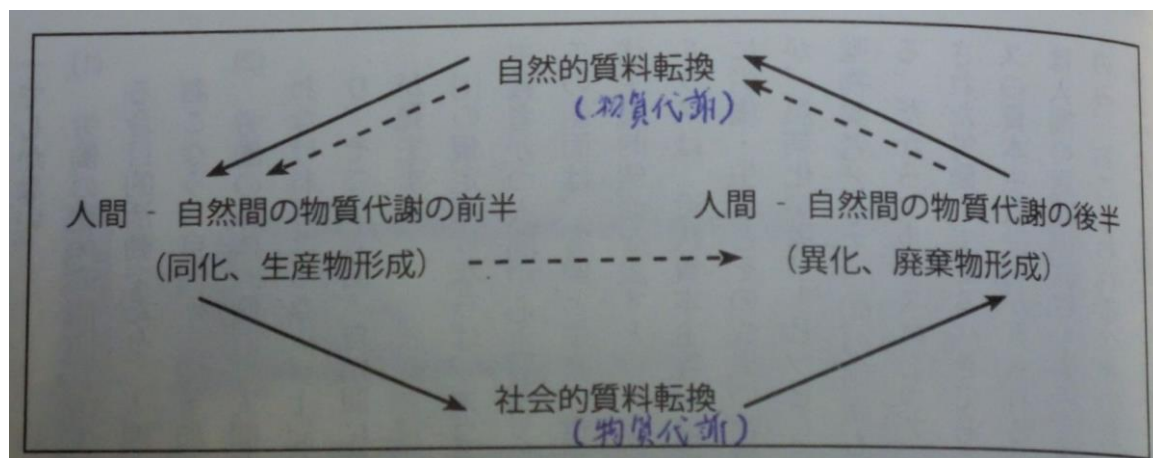
マルクスにとって、人間が技術（→道具、機械）を媒介して自然を人間の目的にしたがって生産・加工するということは、人間の物質生活を考えるうえで一番重要なことである。唯物論者マルクスにとって、これこそ人間生活の第一の基盤であった。ここで発生する人間－自然間の実践的ダイナミズムを無視して、何らかの自然中心主義、人間と自然の共生、自然の保護などを唱えても、それは美辞麗句に終わり、環境問題を展望する有効な思想にならないだろう*7。ところで、岩佐茂氏は、環境問題の現実的発生源を問題とせず、国民、住民の環境意識を高めることを促す立場を「道徳主義的アプローチ」と名づけて批判する*8。われわれが環境問題に対応するエコロジカルな生活スタイルを身につけることは不可欠であるが、温暖化問題を取っても、家庭から発生する温室効果ガスは、わずか一三・五%にすぎず、大部分は産業界・経済界の活動に由来する*9。そこに明確なルールによって規制が、ないしエコ企業にたいする推奨策が実践可能な形で遂行されなければ、環境問題の現実的発生源は解消できない。

三 人間と自然の間の物質代謝の構想

問題は、初発的には、労働や生産のありかたをどう原理的に把握するかである。そこから将来への展望も切り開けるだろう。ここでマルクスの「物質代謝 Stoffwechsel」の思想が大きな鍵となる。数多くの関連箇所の中で、ひとつ引用しよう。

「労働はさしあたり、人間と自然の間のひとつの過程であり、すなわち、そこにおいて人間が自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するひとつの過程である。人間は自然質料に、ひとつの自然力として対応する。」*10

こうして、マルクス自身はどこでも物質代謝について概念規定をしていないようであるが、人間－自然間の物質代謝の全体図式を次のように考えていこう。



いうまでもなく、この物質代謝は人間が生きていくうえで不可欠であり、こうした労働のとらえ方には、これから見るように、環境問題を考えるうえでひとつの原点となるものである。問題は、ここからいかにして疎外された労働や生産のありかたが歴史的・社会的に発生するかである。こうしてマルクスは、「物質代謝」という形で人間と自然の間の物質やエネルギーの循環過程（同化と異化）を考えているが、実はマルクスには、「狭義の物質代謝」（労働における循環過程）と「広義の物質代謝」（消費活動も含め、社会全体と自然との間の循環過程）を構想している。点線の矢印は狭義の物質代謝を示し、外側の実線の矢印は、広義の物質代謝を示す。ここで詳論できないが、実はマルクスは、人間—自然間の物質代謝のほかにも、「自然的物質代謝」（自然界での物質の転換）と「社会的物質代謝」（おもに商品流通における物質の流れ）を構想している。そのことを考慮に入れると、広義の物質代謝とは、自然全体と社会全体の間での物質代謝を意味するであろう* 11。

そして、資本主義が最大限の利潤追求のために、自然の生産性を無償で利用し、こうして個別資本が超過利潤を達成しつつ、他の資本との激しい競争に打ち勝とうとするかぎり、企業は公害などに対応するためのコストはできるかぎり無視しようとする。他方、「本源的蓄積」によって、大地から切り離されて「自由」になった労働者は、その点で自然から基本的に疎外されており、自然（そこからしか生活の資料を獲得することはできない）と再結合し、それを利用するためには、資本—賃労働関係にはいらざるをえない。これにたいして、封建制の農民たちは、いかに強く搾取されようとも、共同体的生活のなかで土地に結合されているかぎり、基本的に土地（自然）からの疎外（根源的切り離し）以前の状態にあった。以上の点に、資本主義社会における公害や地球規模の環境問題が発生する歴史的淵源がある。この経済的発生源を一定のルールによって規制しないかぎり、いつまで

も環境問題は解決できない。ともかく、人間と自然は、将来社会において豊かな形で再結合される必要があるだろう。マルクスにとって、それが共産主義社会であった。

マルクスが誤解されやすいのは、その労働および生産の重視という面から、当時の国民経済学者（アダム・スミスら）と同様の近代主義者と見られるからであろう。だが、マルクスにとって、以上の物質代謝論からも示唆されるように、労働には以下の二側面があり、労働はこの二側面の弁証法的統一でしかない。

(1) 労働の主体的側面。労働は、人間主体が生産物を形成する合目的活動であり、人間がみずからの欲求満足におこなう、自然の生産・加工の活動にほかならない。

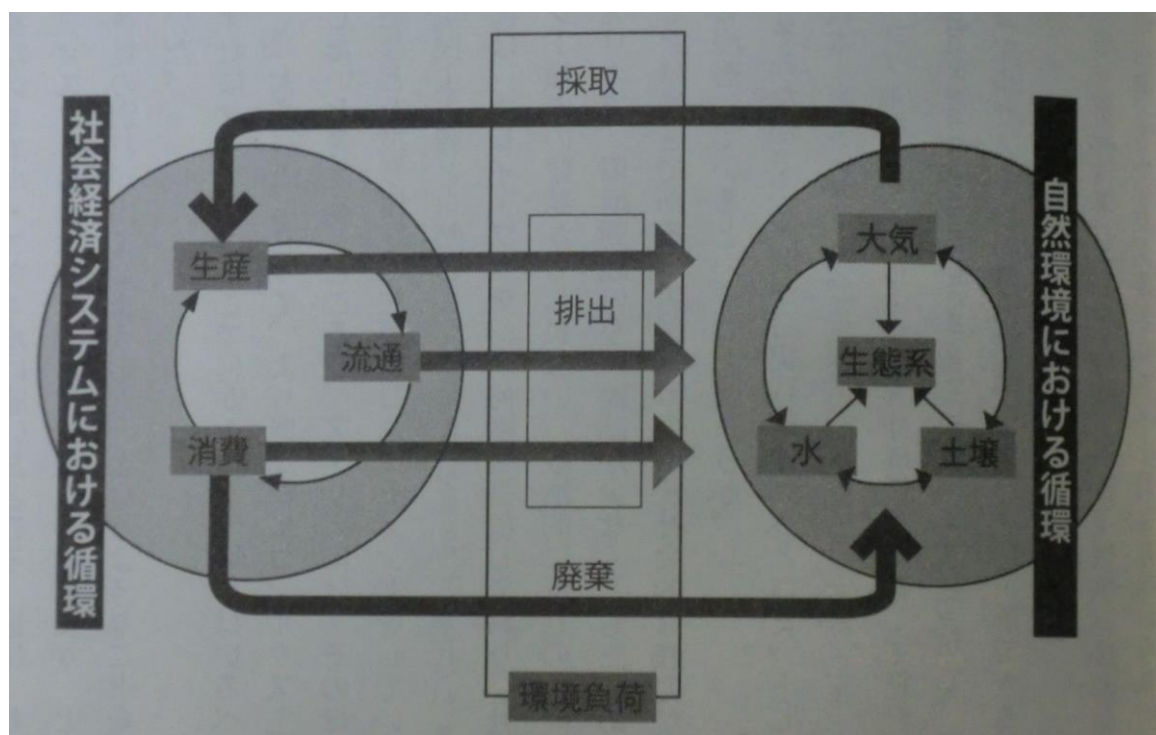
(2) 労働の客体的側面。人間が生命を維持するかぎりおこなわなければならない、上記の物質代謝の運動そのものであり、そこで人間－自然間に物質やエネルギーの客観的循環が発生する。

(1)の規定だけならば、エコロジストから、マルクスは近代主義者かつ人間中心主義者といわれても仕方がないだろう。この側面は、労働と生産の重視という意味で、マルクスの近代主義的側面を表すといえないこともない。この意味で、マルクスは、近代資本主義の継承者であり、人間の幸福の基盤に労働・生産とその成果の物質生活が存在するとみなす。だが、農業化学者リービッヒらに学んだマルクスは、唯物論者として、(2)の側面も労働のなかに含ませたのである。だからマルクスにとって、労働は「エコロジー的に規制された労働」*12であるべきである。ある意味でここに、マルクスの資本主義批判が見られる。すなわち、経済的な人間活動は人間の周囲の自然生態系を健全に保つという条件のもとでのみ、おこなわれるべきである。したがってマルクスは、あるレベルで、自然中心主義と人間中心主義を統一させており、この構えは、自然中心主義か人間中心主義かという、現在までの環境倫理の論争に一定の大きな示唆を与えているといえよう。

ところで、著名な環境運動家のレスター・ブラウンは、生態系（エコロジー）を前提にして、経済活動（エコノミー）をそのなかに調和させるべきであるという意味で、「エコ・エコノミー」を提唱した*13。これは妥当な原則であろう。逆に、「主流の自由主義的エコロジー」が、経済活動のなかに生態系を従属させ、経済成長至上主義を脱却できないのでは、環境問題はいつまでも解決の展望をもてない。マルクスのいいたいことも、その点にあると見ていい。

マルクスのこうした物質代謝の構想は、現代的認識とも合致するであろう。たとえば、『環境白書』は、「社会経済システムにおける循環と自然環境における循環の図式」を提

示する*14。



明らかに、「社会経済システムにおける循環」と「自然環境における循環」との間には物質代謝が想定される。その間で、「採取」と「廃棄」の循環がおこなわれるが、前者における「生産」「流通」の流れは、マルクスの「社会的物質代謝」に対応し、マルクスは「消費」からの廃棄も指摘する。後者の「自然環境における循環」には、生態系を中心としたエコロジー的循環が含まれるが、ここにマルクスのいう「自然的物質代謝」を対応させることができないこともない（この対応が内容的にまったく同一であるとは考えられないけれども）。

四 「エコマルクス主義」の二つのタイプ

ところで、さきほどエコマルクス主義の代表者として、フォスターを引用した。フォスターやポール・バーケットらは、『組織と環境』（季刊）というような左翼的環境雑誌を基礎に活動しているようである。彼らは、マルクスのなかにエコロジー的要素を徹底して探ろうとする。いわばマルクス内在派のエコロジーである。だがその反面、マルクスの枠内を抜けて、現代的問題に介入するという面で弱いような印象を受ける。

これにたいして、アメリカには、別のエコマルクス主義が存在する。こちらは、『資本主義・自然・社会主義』（季刊）という雑誌に結集しており、その中心人物は経済学者のジェームズ・オコンナーである。彼はもちろんマルクス経済学の専門家であるけれども、

哲学的にも含蓄のあるマルクスの文献を丁寧に読解するというよりも、社会学者らしく、実践的観点から、マルクスのどこが有効でどこが不十分かを明快に切りわけようとする。したがって、それほどマルクスを十分に読解しようとはしない傾向がある。『資本主義・自然・社会主義』の現編集責任者のジョエル・コヴェルに聞いたところ、彼は、われわれとフォスターらとは基本的に差異はないはずだが、どうしても意見の別れが出てしまうのだ、というようなことを漏らしていた。

いずれにせよ、私はここで何かセクト争いにはいるべきではなく、大所高所に立って、より豊かなエコマルクス主義を模索したいと考える。ところで、アメリカには、そのほか環境思想などを扱う雑誌で左翼的コミットメントをしているものに、『民主主義と自然 Democracy and Nature』（季刊）がある。これには、マレイ・ブクチンが何回も寄稿しており、社会エコロジー傾向の雑誌かもしれない。政治的に反共の傾向が強いアメリカで、環境問題の左翼雑誌が少なくとも三つあるということは驚きである。アメリカの市民社会的な底力が学問界にも浸透しているということだろうか。

さてそのなかで、学問から実践的運動へとコミットしている『資本主義・自然・社会主義』の宣言文（二〇〇二年、ジョエル・コヴェル、ミシェル・レヴィ作成）を要約して紹介したい（<http://www.cnsjournal.org/mission.html>）。このなかで、現代のエコマルクス主義の基本認識のレベルが了解できるだろう。

…二一世紀はエコロジー危機、テロ、戦争、貧困な社会層の出現などのカタストロフィ一的な兆候から幕開けした。私たちの見解では、エコロジー危機とその他の社会的危機とは深く相互連関しており、同じ構造的力の異なった現れとみなされるべきである。つまりそれは、世界資本主義システムの膨張である。消費主義や政治的無関心をともなう大衆文化を背景に、現存の世界資本主義システム、つまり帝国の論理は、「成長か死か！」の規則に従って動いている。だが、この世界システムは歴史的に破産しており、持続可能ではない。ここではむしろ、「社会主義か野蛮か！」（ローザ・ルクセンブルク）という選択が真実として現れる。

ところで、なぜ「エコ社会主義」なのか、そのことも説明される。

…社会主義は、二〇世紀の現存する社会主義―これは社会主義の第一段階だった―の否定ではなくて、その実現である。ここに見られた解放的目標を保持すべきである。だが、いずれにせよ、社会民主主義と官僚制的な社会主義は拒否されなければならない。この社会主義的立場では、社会の持続可能性の点で、エコロジカルな枠組みが前提となる。

その目標は量的次元のものではなくて、質的次元のものである。この立場は、性と人種問題など、すべての支配に反対する。環境問題を念頭に置き、この立場は化石燃料への依存をやめるべきである。

以上の宣言には、私などはおおいに共感したい。ソ連・東欧の社会主義への批判と継承も確認されているようだ。ここにある「量的次元」の問題とは、いわゆる生産力主義への反省を意味し、「質的次元」とは、単なる経済成長が自己目的とされるのではなくて、環境問題や階級支配をはじめ、すべての支配と差別を撤廃するような経済の質的改革と発展を旨とするということを含意しているだろう。なおこの組織は、二〇〇七年一〇月に、パリの近くのヴァンサンヌで、エコ社会主義者の大規模な会合を開催したようである。

五 「伝統的マルクス主義」から「ポスト・マルクス主義」へ

最後に私は、エコマルクス主義の現段階を論じるために、「伝統的マルクス主義」から「エコマルクス主義の成立」、さらにそこから「エコマルクス主義の変容」へと三段階的に議論を進めたい。これはおもに、『資本主義・自然・社会主義』の多様な議論から私が学んだものであり、ここからわれわれが環境問題などに関して、何をどう考えるべきかがおのずと提起されると思われる。

さてまず、「ポスト・マルクス主義」について詳細に展開したフィリップ・ゴールドスティンの詳細な説明がここで役に立つと思われるので、まず紹介したい。私のまとめでは、「伝統的マルクス主義」とは、①プロレタリアートを中心とした階級闘争理論、②生産力中心主義および経済決定論、③本質主義かつ普遍主義にもとづく人間観、④基本矛盾による体系認識の重視、⑤共産主義の到来を必然的とする運命予定説、などによって規定されるという。これらの規定の妥当性をいま検討する余裕はないが、こうした規定は、『資本主義・自然・社会主義』の中心人物であったジェームズ・オコンナーの考えとほぼ合致しているようであり、こうした理解のなかで、彼も「伝統的マルクス主義」の限界を見定めていると思われる。さらに、ゴールドスティンによれば、「ポスト・マルクス主義」の特徴は、①社会闘争を単に階級に還元するのではなく、人種、民族、ジェンダー、宗教などの差異や「新しい社会運動」に即して幅広く考察する、②本質主義的・普遍主義的な人間観への否定、③ヘーゲル主義や弁証法の拒否、④財の生産のみではなく、家族の再生産労働への注目、⑤理論と客観的实在の単純な区分の否定（言論実践の重視）、などの点にあるとされる*15。オコンナーらのグループも、おおむねこうした立場から、エコロジー

問題などをとらえ返そうとしているとっていいだろう。

それでは、オコンナーはどうかたちで、エコロジー問題に対応するマルクス主義を構築するのか。その点では、彼は、「伝統的マルクス主義」と「エコマルクス主義」を明快に区分する。前者は、生産力と生産関係の矛盾という社会領域の現象を資本主義の根本矛盾と定め、そこから過剰生産恐慌（商品需要の不足）が発生するとされる。したがってそこでは、資本家と賃労働者の対立・矛盾ないし階級闘争が主眼であり、資本主義的生産関係の変革を求める労働運動や政党の運動によって、社会主義を展望することになるだろう。たしかに、こうした認識は、従来のマルクス主義の基本であったといえよう。

いわばここでは、対立・矛盾のとらえ方がひとつしかないという意味で、一元的である。これは「資本主義の第一の矛盾」とっていいだろう。そこではまだ、自然環境の問題などは重大なものとしては登場しない。

これにたいして、「資本主義の第二の矛盾」も合わせて見るのが、「エコマルクス主義」の立場である。オコンナーは論文「資本主義の第二の矛盾」で、「伝統的マルクス主義」と「エコマルクス主義」を詳細に対比しつつ、マルクス主義の現状認識の大きな転換を示す。「『エコマルクス主義』の出発点のポイントは、一方における資本主義的生産関係と生産力との間の矛盾、および他方における〔資本主義的生産関係〕と生産の条件との間の矛盾である。」*16ここでいわれる「生産の条件」とは、マルクスに由来するとされ、①自然環境、②人間の労働力、③都市のインフラストラクチャーや空間的整備など、の三つといわれる。そしてこれらは、基本的に資本の活動に、ほとんど無償で外部から供給されるものである。ここでは、拡大した資本の活動が、単なる階級関係の場で議論されるのみならず、それを暗黙に支えていたはずの生産の前提条件とついに衝突するにいたる。こうした認識は、従来の「伝統的マルクス主義」の社会認識を批判し、全体認識の転換を促す。だから、オコンナーが「エコマルクス主義」によって「資本主義の第二の矛盾」を強調するとき、単に狭い意味での自然環境の問題だけを付加するわけではない。そこでは、環境問題ないしエコロジー問題に向けての運動グループのみならず、フェミニスト、その他のマイノリティの「新しい社会運動」の登場の必然性が強調されている*17。このように見ると、「エコマルクス主義」そのものの客観的な内実は、むしろバーケット、フォスターらによって、マルクス自身に即して詳細に展開されてきたといえよう。オコンナーはいわば足早にそのマルクス・エンゲルスのレベルを通過して、より複雑な現代的問題設定へと向かう。

こうして、エコマルクス主義は「ポスト・マルクス主義」的に新しい段階を迎えているといえよう。実はさきの『資本主義・自然・社会主義』では、彼らエコマルクス主義者とエコフェミニストたちとの真摯な議論が、大きなシンポジウムのなかでなされてきた*18。エコフェミニストとして、アリエル・サレーが編集の中心となっており、日本でもよく知られているマリア・ミースも議論に加わっている。この両グループの議論はまだ開始されたばかりで、ここからさらに、エコマルクス主義は大きな変貌と発展をとげていくことだろう。この展開は、同時に世界資本主義の深い批判的認識へとつながるものである。

*1詳しくは、拙論「経済のグローバル化と映画『ダーウィンの悪夢』の波紋」（東京唯物論研究会編『唯物論』第八一号、二〇〇七年）を参照のこと。

*2MEW23, 285. 大内兵衛・細川嘉六訳『資本論』①、大月書店、三五三頁にこの表現が見られる。

*3なぜマルクスの思想のオリジナリティを「実践的唯物論」として解釈すると、そこにエコマルクス主義が出現するのかについては、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』（こぶし書房、一九九七年）の序章第三節、第一二章などを参照のこと。さらに、マルクス、エンゲルスに即してのエコマルクス主義の詳細な展開については、拙著『エコマルクス主義』知泉書館、二〇〇七年を参照。

*4ジョン・フォスター『マルクスのエコロジー』（渡辺景子訳）こぶし書房、二〇〇四年、八頁を参照。

*5MEW23, 529. 『資本論』①、大月書店、657頁。なお、フォスター『破壊されゆく地球』（渡辺景子訳）こぶし書房、二〇〇一年、七八頁を参照。

*6フォスター『マルクスのエコロジー』、一〇頁。

*7誤解のないように付加すれば、自然中心主義、人間と自然の共生、自然の保護などの思想はそれ自体として有意味であることはもちろんである。エコマルクス主義もある意味で、これらの考えを許容することだろう。問題は人間—自然関係をリアルにとらえようとする、そこに利潤追求を第一目的とする産業的・経済的活動のあり方の問題がどうしても出てくるということであって、この現実的考察を抜いて環境問題に対応しようとするれば、こうした考えはごまかしの役割を果たすことになるだろう。

*8岩佐茂『環境保護の思想』旬報社、二〇〇七年の第六章を参照のこと。

*9平成一九年版『環境白書』ぎょうせい、一一頁。

*10MEW23, 192. 『資本論』①、二三四頁。

*11いま「物質代謝」と訳した Stoffwechsel 概念についての詳細は、拙著『エコマルクス主義』（知泉書館、二〇〇七年）所収の第三章「マルクス唯物論における物質代謝概念」、および拙論「マルクスの

物質代謝・質料転換概念をどうとらえるか？」（札幌唯物論研究会編『唯物論』第八一号、二〇〇四年）を参照のこと。小論では、ごく大雑把にしか述べられない。

*12 Paul Burkett, Marx and Nature: A Red and Green Perspective, St. Martin's Press, New York, 1999, p. 41.

*13 レスター・ブラウン『エコ・エコノミー』（福岡克也監訳・北濃秋子訳）家の光協会、二〇〇二年、とくに一〇一頁以下参照。

*14 平成一四年度版『環境白書』ぎょうせい、三頁。

*15 以上、Philip Goldstein, Post-Marxist Theory, State University of New York Press, Albany, 2005. の「序文」および「結論」を参照。以上の「ポスト・マルクス主義」の規定にたいして、オコンナーはまったく賛同するわけではない。たとえば彼は、「ポスト・マルクス主義」の一角を形成するラクラウ、ムフによる、マルクス主義が「本質主義」に陥っているという批判にたいして、この指摘は「資本主義的かつ歴史的な変化のマルクスの理論の精神と実体を侵している」と釘を刺す。だがそれでも、「伝統的マルクス主義」への批判、「新しい社会運動」への積極的評価など、全体認識として、ここには大きな共通性が見られることにまちがいはない。Cf. James O' Connor, Natural Causes: Essays in Ecological Marxism, The Guilford Press, New York/London, 1998, p. 17.

*16 O' Connor, Op. cit., p. 164.

*17 「伝統的マルクス主義」の社会認識と「エコマルクス主義」のそれとの比較対照されたわかりやすい図式が James O' Connor, Op. cit., p. 172. に掲載されており、参考となる。オコンナー「持続可能な資本主義はありうるか」（リチャード・エバノフ編／小原秀雄監修『環境思想と社会』東海大学出版会、一九九五年）は、比較的短い論文であるが、そこに、「生産の三つの条件」が指摘されている。

*18 Capitalism Nature Socialism, December 2006. シンポジウム「エコフェミニズムとの対話」。同誌では、「サブシステム」「蓄積」「身体」「労働と階級」「弁証法」「唯物論」という六つの基本テーマにそって、それぞれまずエコマルクス主義者の側が問題提起し、それにエコフェミニストたちが応答するという構成を取っており、きわめて興味深い論戦が展開されている。おおむね、エコマルクス主義者はエコフェミニストの議論を真摯に受け止めて展開するが、エコフェミニストたちはその現状認識がまだまだ甘いということで、その不十分性を遠慮なく指摘する、という構図になっている。